

着脱可能な骨格の一部

癒着・着脱させる

骨格が支える

皮膚に触れる瞬間

離れる瞬間を引き延ばす

葉のように広げた内臓で包み込む

見慣れない様を彫刻する

指の関節を巻き込む

骨格・内臓・筋組織からの納得を得る

蛇腹を広げる要領で立ち上がる

硬い床の隙間に突き立てる

脇の隙間で捕獲する

汗ばんだ指を握り込む

地面の反射エネルギーを捉える

肩トルソー腰へとブリッジを渡す

圧倒的な重さを運搬する

（脚から重さを解放）

背中から

圧倒的な

重さが

背面の

肩甲骨の

隙間の

間から

圧倒的な

重さが

背面から

三角形の

頂点のように

後ろ側に

刃物が

突き出していく

重さが

背面の

三角形の

頂点に

重さが
背面の
背中の
重さが
月大のていく
重さを
真下に
落下させていく
のを
こぼれないように
骨盤から
どう考えても
足りない
脚数の
どう考えても
足りない
脚数の
圧倒的な
重さを
椅子が

真下に

落下する

重さを

どう考えても

足りない脚数で

椅子が

まし「あに

落下する

重さが

頭から

稲穂が

垂れるように

重さが

落下していくのを

どう考えても足りない

脚数の

椅子の

天板が

重さの

エネルギーを

跳ね返して

背骨から

それが

温泉のように

通っていった

頭から

抜けていくのを

観測していると

生きる上で

私が強いられる

究極の姿勢が

座して待つこと

座して待ち続けることが

究極の姿勢である

待ち続ける

一種の酩酊の中で

身体が

動きの

内部で

摂氏36度の

血の塊の中で

動きが

究極の

座して待ち続ける中で

湧き上がってくるのを

精神が

待っていたかのように捕まえて

肩の

月の上から

うさがが

ある種類の

うさがが

一種の酩酊の中で

座して待ち続けることが

究極の姿勢の中で

危機に見舞われると

身体は

雑談ではなく

密談を始めると聴いたことがある

その

コミュニケ、シヨンの伝達のスピードが身体に
各部位を駆け回っていくのを

一種の

宇宙的な音速時代に到達した人類のタイピング
の指の皮膜から漏れてくるのを

薬指から

生える

はなが

さらに話しかけている

鎖骨が止めお用途

鎖を伸ばしていく

中を掻い潜って

斥候等を一人雇って

目の裏側から

身体を監視する役目を

与えられた

についの肘の鉄を

肘が

鉄であり

てつが

肘である

ひたいに乗せて

寝返りを打つのを

辞めないように

てつが

紛れもなく

肘であつた時代

目を覚まして

目を

覚まして

と音が聞こえてくる

耳の

奥の

ひだの

中を

目を覚ましてと

音が

ひだの中を反響させて

時代性が

逆行する

右膝と

耳の間の距離を

聴いていく

音がなっているよと
膝が

耳に耳打ちしている

足の裏の

ゴムのきが

赤道の国から

石油を燃やしながら

やってくる時代に

2200年前の

夢の

後に

目を覚まして

目を覚ましてと

身体の

心臓のリズムが

伝えてきて

そのリズムが

身体を

ましたから突き上げてきて

それ

コアラ

の

中の

袋に

仕舞い込んでいた

ものを解放する形で

足の

膝の

ジョイントが

密談を再開しているのを

聞き漏らさまいと

心臓のパルスが

たいいかな

モールズを受け取って

てがみを

開いた

肋の

中の

唇の中に

ての柔らかい部分が

内臓みたいに

設置していくのを

排除されないように

丁寧に

鉄の上に

置いていく

骨格を装着

繰り返していく

究極の姿勢の

歪みが

活断層を

ズレる

形で

倒れ込んでいくのを

支える

数本の

足りない

針葉樹林で

採取した

外骨格の

包み込みを

話して

左の

足の

すみから

住人が

移動するのを

左の腕の

回転を

客観視するのを

両生類の巣穴が

身体中の

粘膜をおおい

その巣穴と

背中の

律動を辞めない

背骨筋肉と

関係を持つとうとするのを

距離を測って

一種の

身体の影響が後ろに立っている

その影の

目の中の

窪みの

奥に

落ちていく

頭

文字が

走り回る

身体の表面積は

2200年前から

変わっていて

そのおとの

波状に広がる

身体の

面積が

文字の

密度を

変えていくのをお

身体の

各関節部位が

悟っているのをお

ニユースペーパーは

見て見ないふりをしているので絡んだ

指の

タイピングの

速度を

新幹線が

超えていく

背中から

伸びていくのを

辞めないで

建設を続けると

滝のような

森の中から

一種の

かげかか

右膝の

半月の

った」

黒いぶぶすか

手のひらで一つの

彫刻の

隙間を

文字が

早足で

駆け込んでくるのを

捕獲するために

首の

蛇腹が

伸びていくうちに

身体に流れている

文字群が

次第に

そとに

胃液と共に

漏れ出してくるのを

空間を振動させる

音が

捉えていって

絡め取って

文字群が

大量に

待っているのが

自分の身体の

究極の

姿勢の中で

大量の

文字が

次第に

気がつかないうちに

飛んでいるのが

身体が

捕獲して

そのまた

さらに上書きをするために

動きづらい

膝の

荷重制限を

力学の

全てを貫く

一般法則を

全てを

貫いている

力学の

一般法則を

無視する形で

逆の

形で

再現されるのをお

巨大な

音の

壁が

耳の

振動の

パルスを

身体の表面積で取り組んでいくと

文字と

身体の

壁画を

塗りつぶしていくのを

音が

次第に

遠ざかると共に

坂のしたに

降りていく要領で

納得させつつ

一種の究極の姿勢のまま

その

音が

ずっと

なっていたことを

気づいて

熱い機体の感覚が

再び

うちがわから

出てくるのを

まつ